

研究紀要

第38号

- | | |
|---|-----------|
| 清河寺前原遺跡における単独出土の台形様石器について | 水村 雄功 |
| トチの実と堅果類のアク抜きに関する研究史 | 大屋道則 栗島義明 |
| 寄居町用土・平遺跡と「用土・平」式に関する覚書 | 通野 健 |
| 反町遺跡出土土器の数量 | 福田 聖 |
| 北大竹遺跡における祭祀関連遺構の再検討
—出土遺物時期の整理— | 渡邊 理伊知 |
| 北大竹遺跡出土の単鳳環頭大刀について | 古間 果那子 |
| 3D データを用いた横穴式石室の定量的分析の一手法 | 青木 弘 |
| 関東地方における武蔵型甕の様相 | 滝澤 誠 |
| 「白い坏形カワラケ」考 | 村山 卓 |
| 「乾武」の中世・金窪城と金窪南城
～金久保内出遺跡・清水南遺跡調査の伴奏として～ | 平田 重之 |
| 遺跡出土の鉛製玩具について
—久喜市栗橋宿跡関連遺跡出土資料を中心に— | 瀧瀬 芳之 |
| 栗橋宿における銘酒の流通
—地廻り経済圏の残滓と崩壊— | 魚水 環 |
| 平右衛門遺跡周辺の中世と中三谷遺跡 | 儘田 めぐみ |

2024

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

序

清河寺前原遺跡における単独出土の台形様石器について……………水村 雄功 (1)

トチの実と堅果類のアク抜きに関する研究史……………大屋道則 栗島義明 (7)

寄居町用土・平遺跡と「用土・平」式に関する覚書……………通野 健 (35)

反町遺跡出土土器の数量……………福田 聖 (61)

北大竹遺跡における祭祀関連遺構の再検討

—出土遺物時期の整理—……………渡邊 理伊知 (81)

北大竹遺跡出土の単鳳環頭大刀について……………古間 果那子 (101)

3D データを用いた横穴式石室の定量的分析の一手法……………青木 弘 (115)

関東地方における武蔵型甕の様相……………滝澤 誠 (135)

「白い坏形カワラケ」考 ……………村山 卓 (153)

「乾武」の中世・金窪城と金窪南城

～金久保内出遺跡・清水南遺跡調査の伴奏として～……………平田 重之 (185)

遺跡出土の鉛製玩具について

—久喜市栗橋宿跡関連遺跡出土資料を中心に—……………瀧瀬 芳之 (207)

栗橋宿における銘酒の流通

—地廻り経済圏の残滓と崩壊—……………魚水 環 (231)

平右衛門遺跡周辺の中世と中三谷遺跡……………儘田 めぐみ (252)

関東地方における武蔵型甕の様相

滝澤 誠

要旨 本稿は埼玉県以外の関東地方各県における武蔵型甕の変遷を概観し、その様相を捉えることを目的とした。武蔵型甕分布の中心地となる群馬県・東京都では全時期を通して武蔵型甕の存在が確認できた。周辺地域を見ると、栃木県では10世紀以降は急速に減少するものの、8世紀から9世紀にかけて一定量確認できること、千葉県では8世紀代に増加する傾向が認められること、神奈川県では逆に9世紀後半以降に増加する状況などが捉えられた。地域によって出現や消滅時期に違いは認められるものの、形態変化の様相は同じであり、変化する時期にもあまり差が無いことから、これらの変化は同時に起こっていることを確認した。

はじめに

武蔵型甕は東京都・埼玉県・群馬県を中心に、関東甲信越地方に広く分布する土師器の甕である。

武蔵型甕という呼称は昭和51年に河野喜映氏によって提唱された「武蔵型の甕」に端を発するものだが、実態は武蔵国・上野国の他に、信濃国に属する長野県佐久市周辺でも主体的に使用される。

筆者は別稿で弘仁地震によって被災したと考えられる埼玉県加須市宮東遺跡第75b号住居跡と、仁和の洪水によって埋没したと考えられる長野県佐久市砂原遺跡1号竪穴住居跡から出土した武蔵型甕を定点資料として位置づけた。また埼玉県北地域と長野県佐久市周辺における武蔵型甕の形式変化を比較した上で、変化の同時性を確認し、変遷案と年代観を提示した(滝澤2023)。

本論では埼玉県周辺地域における武蔵型甕の変遷を確認し、形態変化とそれぞれの時期について確認する。その上で先述した変遷と比較し、変化の同時性が確認できるか検討したい。

1 武蔵型甕の分布状況

武蔵型甕の研究史については、別稿(滝澤2023)でまとめているため、そちらを参照していただき

たい。ここでは分布状況を概観し、必要に応じて先行研究にも触れていく。

武蔵型甕の分布状況については、上里町中堀遺跡の報告書中にて末木啓介氏によってまとめられたものが最も広域に捉えていると思われる(末木1997)。本稿の作成に当たっても参考にさせて頂いた。

武蔵型甕の分布範囲を示したのが第1図である。時期によって分布に濃淡があるため、時期別にすると範囲も変化するが、凡その範囲として捉えておきたい。また、東京都・埼玉県・群馬県域ではほぼ全域で出土するため、周辺地域について概観することとする。

分布域は関東全域に広がるが、独自の甕を持つ地域を避ける形となり、常陸型甕が主体を占める茨城県域では極端に少ない。下総国に属する坂東市や下妻市などでは確認されているが、常陸国内ではほとんど出土しない。これは甕の形状差に伴うカマド構造の違いによるものという見解が高橋一夫氏によって示されている(高橋2010)。

甲斐型甕を持つ山梨県域も同様であり、大月市や北杜市で僅かに認められるが、武蔵型甕の出土量も非常に少なく、報告では容器として使用されたものである可能性が指摘されている(伊藤2000)。

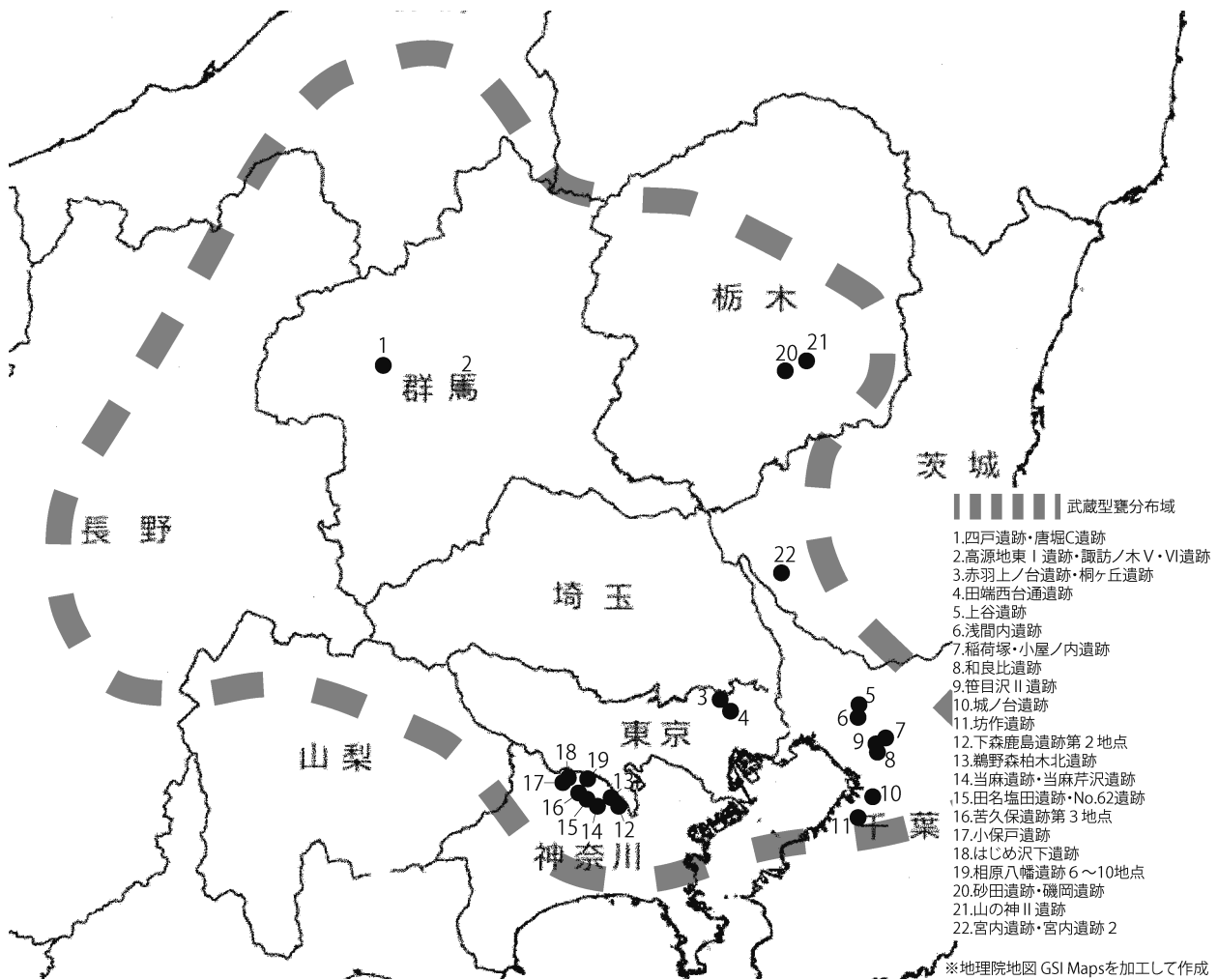
神奈川県域では茨城・山梨の両県程ではないが、相模型甕が主体を占めるため武蔵型甕の出土量は少ない。ただし、9世紀後半頃から出土量が増加する傾向がある。

以上のように独自の甕が主体的となる地域がある一方で、複数の甕が混在する地域もある。千葉県域では独自の上総型・下総型の甕を持つが、武蔵型甕や常陸型甕も一定量出土する。それも同一遺構から複数のタイプの甕が出土する状況である。武蔵型甕と上総・下総型の甕ならば併用も可能かと考えられるが、先述した高橋氏の指摘にあるように、常陸型甕とでは器形や重量が大きく異なるため、カマドの構築材や容器として使用されたのであろうか。いずれにせよ様々な地域の甕が

流通や人の交流が多いため、複数の地域の甕が入手できる環境であったと考えられる。ただ武蔵型甕が多く認められるのは8世紀代であり、9世紀以降になると出土量は減少する傾向がある。

栃木県域では県西部には武蔵型甕が分布し、東部では下野（常陸）型甕が分布するとともに、独自の鶴田中原タイプ甕が併存する状況を示す。ただ武蔵型甕は10世紀以降には使用されなくなる。

長野県域では冒頭で述べたように佐久市周辺で独特の分布状況を示す。8～9世紀後半にかけては武蔵型甕が主体を占め、9世紀末頃になるとロクロ整形の甕が主体となる様相を示す。また水沢教子氏によって屋代遺跡群から出土した煮沸具の胎土分析が行われ、その中に武蔵型甕が含まれて



第1図 武蔵型甕の分布域と対象遺跡位置図

いる(水沢 2007・2008)。分析の結果、武蔵型甕は他の在り土器とは組成が異なるとされた上で、胎土中に石英片岩やホルンフェルスが含まれ、粘土についても在り土とは異なるという成果が得られている。この結果から武蔵型甕は北武蔵・上野地域からの搬入品である可能性が指摘されている。

佐久市周辺以外でも、松本平や諏訪地域で主体ではないものの分布が確認されており、山梨県域では非常に少ないのに対し、山梨県北西部と近接する諏訪市や茅野市で複数確認されている点は興味深い。

新潟県域では魚沼地域周辺で確認されている(春日 2007)。量は少ないものの、8世紀後半から10世紀までの資料が確認されており、角閃石を含む搬入品以外に、忠実に模倣されたものも確認され、集団移民で移住し土着した人々によって制作された可能性が指摘されている(田中 2021)。

また新潟県でも田中祐樹氏によって武蔵型甕の自然科学分析が行われており(田中 2023)、泥質片岩を含むものと含まないものが認められたことから、搬入品の中に少なくとも2つ以上の系統があることが確認されている。このことは生産体制を考える上で重要な指摘といえよう。

2 各県における形式変化の様相

各県における武蔵型甕の変遷を見ていきたい。中心となる地域以外では武蔵型甕が比較的多く出土する地域を対象として、かつ報告書中で年代について言及されているものから抽出した。なお、提示した年代については報告書に準拠している。また各年代の中に前段階的な特徴を持つものも含まれるが、その段階で作られていたものなのか、カマド等の構築材として使用された古いものが含まれるための不明な為、そのまま提示している。

2-1 群馬県の様相

群馬県内では遺物量で見ると前橋市や高崎市周辺のほうが多いが、埼玉県北部と距離が接近しているため、群馬県の中央部に位置する渋川市と東

吾妻町から抽出した(第2図)。

7世紀末～8世紀初頭段階では3のように頸部直下のケズリが斜め方向に入るものが多く、これらは7世紀段階から認められるものである。器形的には8世紀前半の武蔵型甕と同様であり、斜めケズリのものを含めると武蔵型甕の成立時期も7世紀まで遡ることとなり、これをプロトタイプとして7世紀中頃や後半段階で武蔵型甕が成立しているとする見解もある(桜岡 2003)。ただ、8世紀以降に武蔵型甕の特徴である頸部直下に明確な横ヘラケズリが施される1・2のようなタイプが現れるため、本論ではこれ以降を扱いたい。器形はまだ寸胴型で胴部に膨らみを持たず、「くの字」状というより「」状に近い頸部形状となる。

8世紀前半段階の4・5はやや胴部が膨らみ、大きく開く「くの字」状の頸部形状となる。この段階には頸部直下の調整がほぼ横ヘラケズリになる。

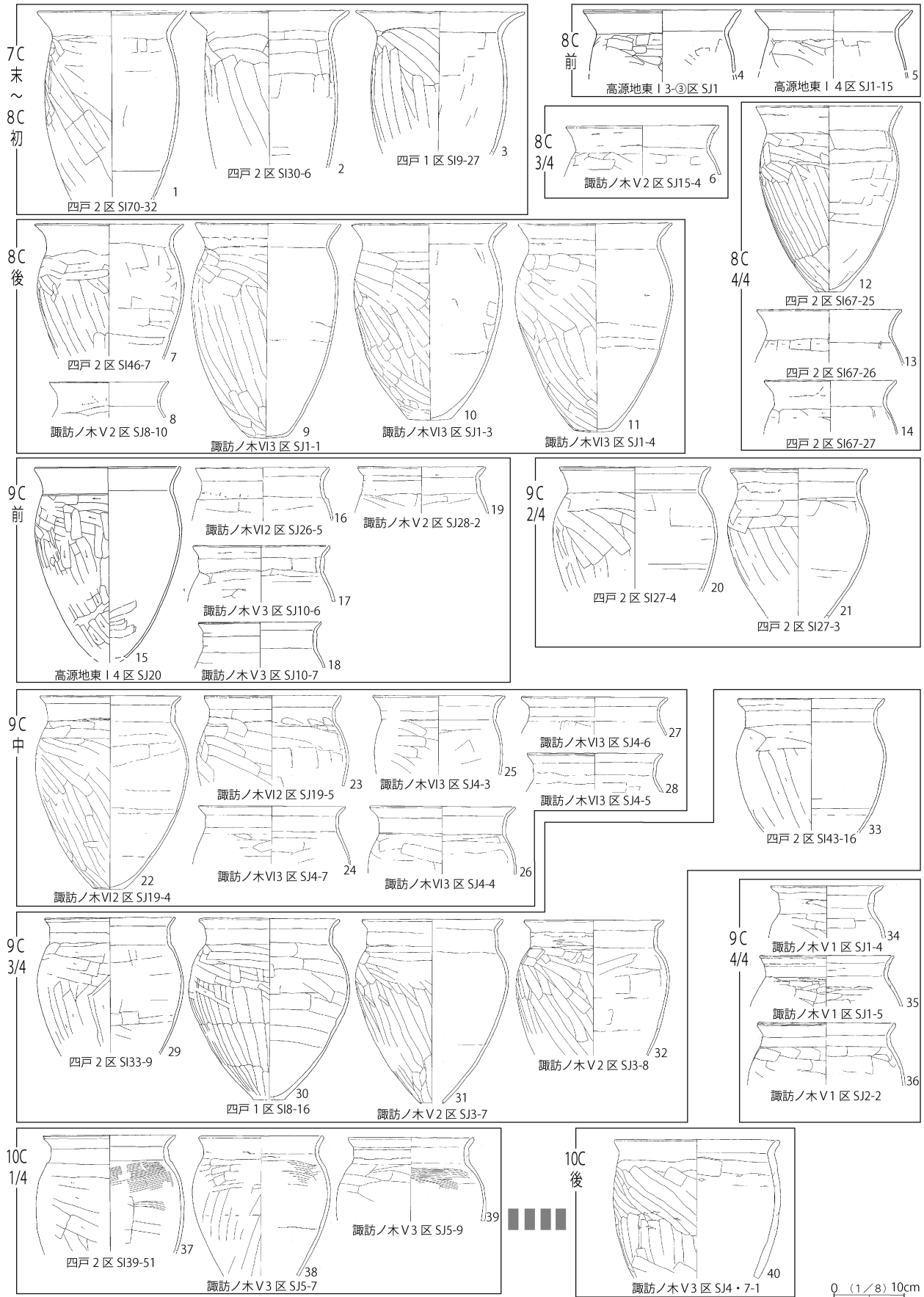
8世紀中頃は提示できた資料が6のみだが、胴部が膨らむことによって屈曲が強くなり、明確な「くの字」状口縁になる。胴部が膨らむ形態は以降継続する。8世紀後半以降に含まれる9・10・12も本来この時期に含まれるものと考えられる。

8世紀後半には7・11のように頸部の「くの字」状が崩れてゆき、第4四半期には14のように弓形のものが見られる。9世紀前半に含まれる15はこの段階のものか。

9世紀前半では16はまだ「コの字」状への移行期的な様相を持つため8世紀末～9世紀初頭頃のものと考えられるが、17～19は「コの字」化している。この段階の「コの字」状口縁はやや縦に長い。また9世紀中葉に含まれているが、22・26～28は「コの字」状への移行期的な様相を持つものであり、前葉寄りのものと考えられる。

9世紀中葉には23・24・30・32のような典型的な「コの字」状口縁が成立する。

9世紀後半には30・32のような定型化した「コの字」状口縁が続くが、第4四半期頃には35・



第2図 群馬県渋川市・東吾妻町の様相

36のように「コの字」状が崩れる。37・39は10世紀前半に含まれるが本来この段階のものか。

10世紀前半には「コの字」状が崩れたことにより再び「くの字」状口縁化し、器壁も厚手となる。ただし胴部上半に横へラケズリ、下半に縦へラケズリという調整方法は引き続き残る。

10世紀中葉以降の武蔵型甕は衰退が激しく、形の崩壊が進み、名残りを残すものは40のように調整方法のみとなる。器壁が厚く口縁部が大きく開き、頸部形状は「くの字」状になる。

以上、群馬県の様相を概観した。武蔵型甕分布の中心地であることから、出現から衰退まで全時期を通して確認できる状況となっている。

2-2 東京都の様相

東京都では23区の北部に位置する北区から抽出した(第3図)。埼玉県南東部に接しており、南武蔵の様相を表していると考えられる。

8世紀前半では2・9・10のように胴部の膨らみが弱く、肩も張らないためゆるやかな「くの字」状となる。1は調整が武蔵型甕的だが、胴部が短く他の武蔵型甕と比較すると違和感があるため別系統のものか。4・6～8は第2四半期に含まれるため時期的には中葉寄りだが、器形としてはこの段階に含まれるものと考えられる。

8世紀中葉には胴部が膨らみ明確な「くの字」状を呈するものが現れる。5などが特徴的である。8世紀中～後半とされているため詳細な時期は不明だが、12などもこの段階のものか。また8世紀末～9世紀前半に含まれているが、28などもこの段階のものと考えられ、破片資料と思われるため混入したものか。

8世紀後半では屈曲が弱くなる「くの字」状崩れのものが多くなる。8世紀中～後半とされた中では11・14、後～末の中では18～21・23などが特徴的である。15・22などは他とやや形態が異なるため、先述した1の系統のものか。なお、13は「コの字」状口縁への移行期的な形態であり、

9世紀代的な様相を持つものである。この時期に伴うものであれば、先駆的な存在となるが、覆土中層から出土した破片資料であり、底部回転糸切り離し無調整の須恵器坏なども出土していることから、混入か時期幅がもう少し広い可能性がある。

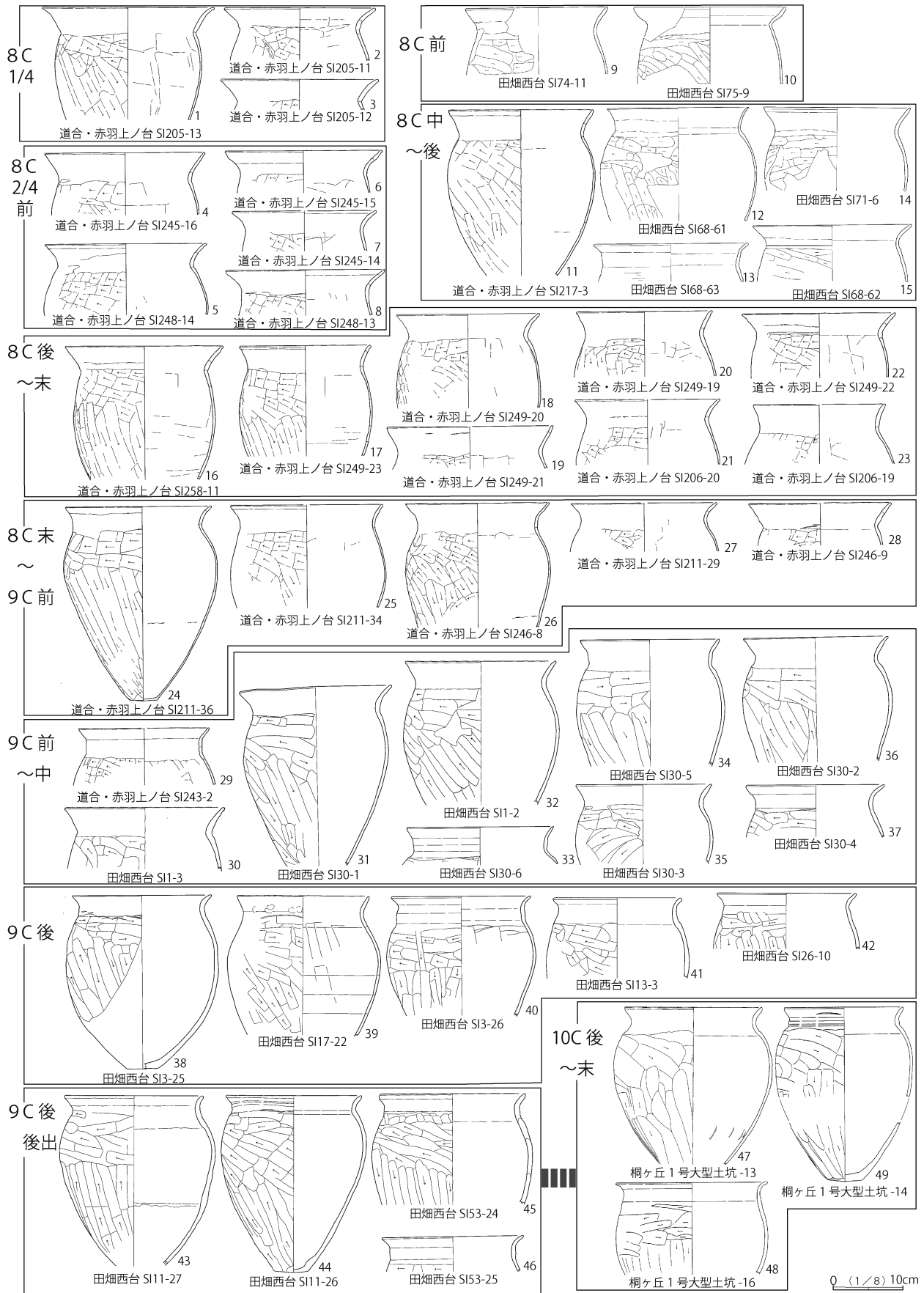
8世紀末～9世紀前半では「くの字」状崩れの段階にあたる25・27などと共に「コの字」状口縁の前身的な24・26などの甕が認められる。前者は8世紀寄り、後者は9世紀寄りのものと考えられる。特に26は後述するように加須市宮東遺跡第75b号住居跡で出土したものと同様の形態であることから、弘仁九年(818)前後のものである可能性がある。

9世紀前～中頃とされるものには、「コの字」状を呈する29・33・34などがあり、前身的な特徴を持つ37も含まれる。前者が9世紀中頃、後者が9世紀前半の様相を持つものと考えられる。基本的には「コの字」状口縁に移行している時期と想定されるが、「くの字」状崩れの頸部形状を持つものが多く含まれる。これらは前述のように8世紀後半の様相を持つものだが、混入とするには数が多く、また残存率が高い。カマドの構築材などとして長く使われたものなのか、或いは別系統から派生したものなのだろうか。

9世紀後半～末の段階では40や46のように「コの字」状のものが残るが、主体となるのは「コの字」状が崩れ「くの字」に転換の段階に当たる。39・41・42・43・44・45などは他の地域では10世紀前半の様相に近い形状である。他の地域よりも「コの字」状口縁の崩壊が先行するのだろうか。

10世紀以降のものとして桐ヶ丘1号大型土壇のものを抽出した。10世紀後半～末とされるもので、49は10世紀前～中葉的な様相を持つが、48は後半的な様相を持つものと考えられる。いずれも「くの字」状の頸部形状を持ち、48は口縁部が大きく開いて鍋に近い形状になる。

以上、東京都の様相を概観した。こちらも武蔵



第3図 東京都北区の様相

型甕の中心地域となるため、8世紀から10世紀代まで通して武蔵型甕が確認された。ただ、1のように調整は類似するが別系統の可能性のあるものや、「コの字」状口縁の崩壊が早いことなど、群馬県とはやや異なる様相も認められた。

2-3 千葉県の様相

千葉県内では先述したように複数の系統の甕が混在しているため、武蔵型甕が主体的という状況ではない。しかし北部に位置する四街道市周辺に比較的多く分布が確認されたため、同市を中心に抽出した。また四街道市は下総国に当たるが、上総国に含まれる市原市周辺でも確認できる。地理的には近接した地域だが、ここでは下総国として四街道市周辺、上総国として市原市と分けて分類を行った(第4図)。

四街道市周辺では8世紀中葉頃から武蔵型甕が確認される。8世紀第2四半期とされるものの中では、2・5・11・15は胴部の膨らみが少し弱いことからやや古い形態と考えられる。6・7・9・12は胴部が膨らみ、頸部が「くの字」状になるもので、中葉寄りの形態と考えられる。第4四半期に含まれる16や、8世紀第3四半期～9世紀初頭に含まれる20・21などもこの段階のものと考えられる。1・8は器形的には武蔵型甕とよく似ているが、調整が胴部上半・下半を分けずに一気に削っているため模倣または別系統のものと考えられる。

8世紀後半のものとしては13・14・17～19があり、頸部の「くの字」状が崩れ弓形になるものである。9世紀前半に含まれる22もこの段階の様相を持つものと考えられる。また17・19などは「コの字」状への過渡期的な様相を持つことからやや後出する形態と考えられる。

9世紀代については、年代が言及されているものの中では見つけることができなかった。ただ、周辺地域に当たる千葉市や八日市市などで9世紀代と思われるものが散見されたため、時期不詳のものを一括でまとめたのが23～29である。い

ずれも8世紀後半～9世紀代のものと考えられ、29については頸部が「コの字」状を呈する。おそらく9世紀第2～3四半期頃のものと考えられ、9世紀前半に位置づけられるものは無いものの、この段階までは武蔵型甕が使用されていたという状況が窺える。

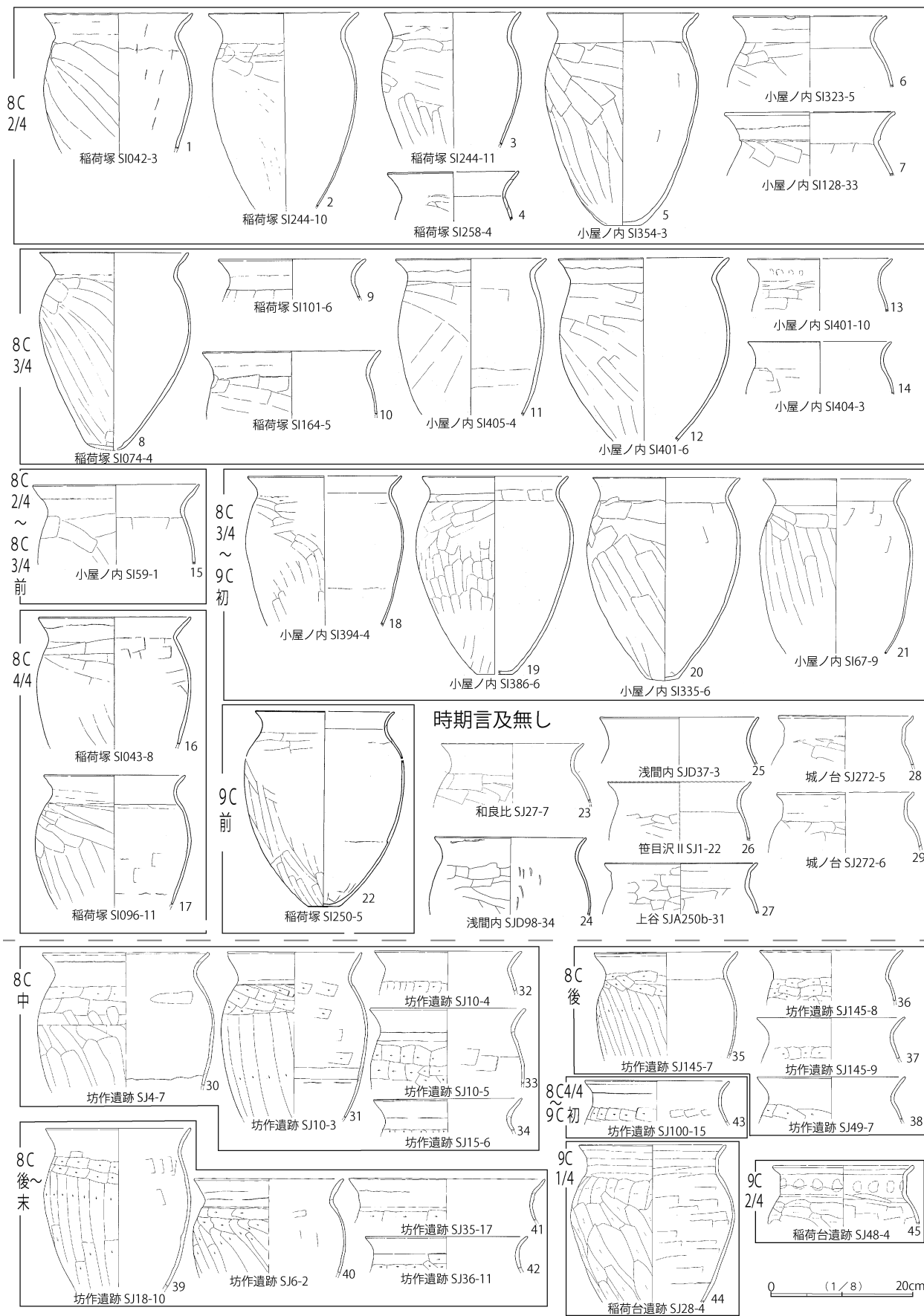
ただ、8世紀代の出方と比べると9世紀代は出土量が減る印象を受けた。年代が言及されている報告書でも9世紀代の遺構は検出されていたが、その中に武蔵型甕は無かった。全ての遺跡を対象に悉皆調査をしたわけでは無いため、偶然という可能性も残るが、現状では下総地域における武蔵型甕の使用は8世紀代の特徴として捉えたい。

市原市では坊作遺跡から武蔵型甕がまとまった量かつある程度時期幅を持って出土している。また9世紀代については稲荷台遺跡で確認されているため両遺跡から抽出し、様相を概観したい。

8世紀中葉では胴部が膨らみ、頸部が明確な「くの字」状になるものが主体的である。8世紀後半に含まれる35・36や、8世紀後～末に含まれる40もこの段階の様相を持つものと考えられる。

8世紀後半には「くの字」状が崩れ弓形になるものが主体的となる。35・37・38・39・41・42などが該当する。41は「コの字」状口縁への移行期的な様相を持つことから、やや後出するものと考えられる。

9世紀前半では出土量が減少するものの44・45が認められた。また時期的には8世紀第4四半期～9世紀初頭に含まれているが、43は「コの字」状の前段階的な様相を持つもので、これらは宮東遺跡75b号住居跡出土のものに近い形態であることから、弘仁九年(818)前後の時期のものと考えられる。44は「コの字」状に近い形状ながら、各辺がまだ不明瞭で、「コの字」状の前身的な様相を持つものである。ただ宮東遺跡第75b号住居跡出土のものより「コの字」に近い形態となることから、9世紀第1四半期の中でもやや後出する



第4図 千葉県の様相(上段：四街道市周辺 下段：市原市)

ものか。45は「コの字」状成立期のものと考えられ、各辺が明瞭になる。また前後の段階よりも頸部が縦にやや長くなるのも特徴的である。

坊作遺跡では9世紀代以降の遺構も多数存在するが、定型化した「コの字」状口縁を持つ甕は認められなかった。稲荷台遺跡でも少量確認できるものの量的には少ない。これらのことから、全く出土しなくなるという状況ではないと考えられるが、出土量が減少する傾向はこちらでも認められるようである。

また四街道市などの下総国側では複数の遺跡で武蔵型甕が出土しているのに対し、市原市域では坊作遺跡や稲荷台遺跡などで集中的に出土する傾向が認められる。武蔵型甕の流通、または人の移動を示す可能性があり、更に検討が必要であろう。

以上、千葉県の様相を下総国域と上総国域に分けて概観した。両国域を分けて分類したが、分布の傾向などに相違はあるものの、時期等に大きな隔たりは無いようである。千葉県内では主に8世紀中頃から武蔵型甕が使用されるようになり、9世紀以降になると減少するという状況であった。

2-4 神奈川県の様相

神奈川県域では相模型甕が主体的であり、武蔵型甕の出土量は少ない。ただし、東京都と接する相模原市では比較的まとまった量の武蔵型甕が確認されているため、相模原市から抽出を行った(第5図)。

8世紀段階のものは少なく、確認できたものは1~3のみであった。8世紀第4四半期~9世紀第1四半期とされており、頸部形状は「くの字」状がやや崩れた形態であり、他の地域では8世紀中葉~後半の様相と考えられる。いずれも同一遺構から出土しており、他に認められないことから、この時期ではあまり武蔵型甕は使用されていないようである。

次に確認されるのは9世紀後半以降になる。この時期には4・8・10・11・12・14・16・

18・19・20・21のような「コの字」状口縁が主体となると考えられる。また13・17・22は「コの字」状が崩れた段階のもので、9世紀末頃の様相を持つものと考えられる。

これらの中で9世紀後半の段階で9・10・15のように「くの字」状崩れの段階の甕が含まれている点が注目される。8世紀代から9世紀中頃までのものが無い中で出土しているため、混入品とは考えづらく、9世紀後半段階までこれらの「くの字」状口縁の甕が作られていたか、あるいは別系統の甕だろうか。5・6は肩部に横ヘラケズリらしき調整があるため含めたが、別系統の甕である可能性がある。また7についても調整は類似するが厚手となるため別系統の可能性もある。

10世紀前半以降になると、「コの字」状の崩壊による「くの字」状化したものが主体となる。いずれも調整方法は武蔵型甕を踏襲しているが、ケズリが甘く厚手になっており、形骸化している状況が捉えられる。

相模原市域では、基本的に9世紀後半以降武蔵型甕が広く普及するようになり、特に10世紀前後以降に増加するという状況のようである。

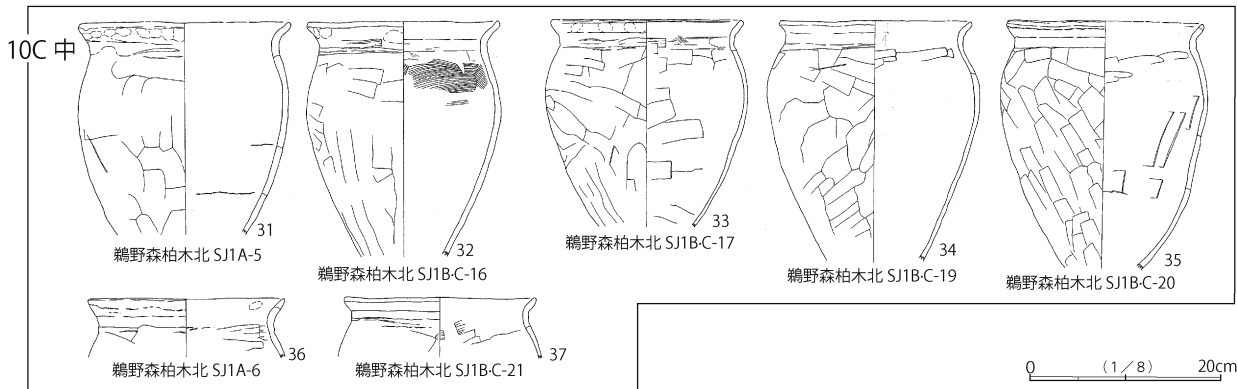
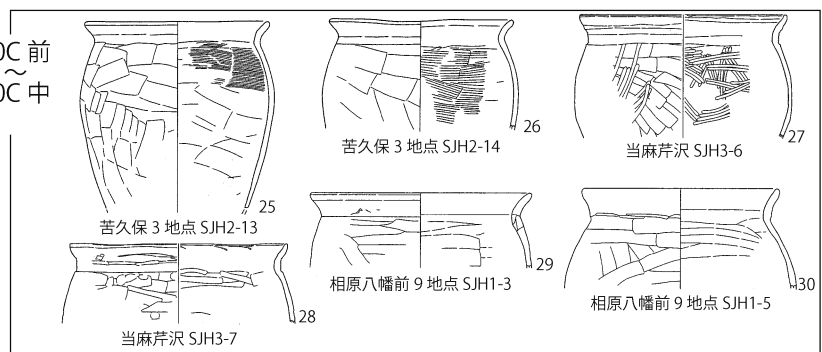
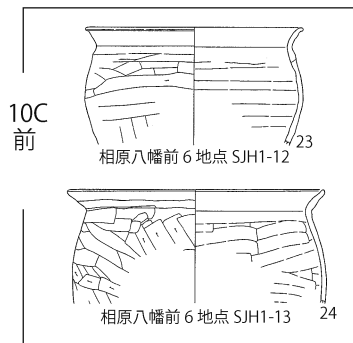
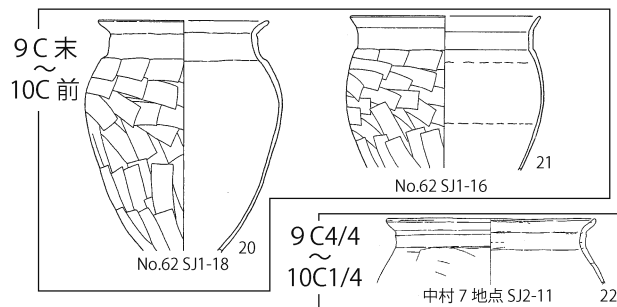
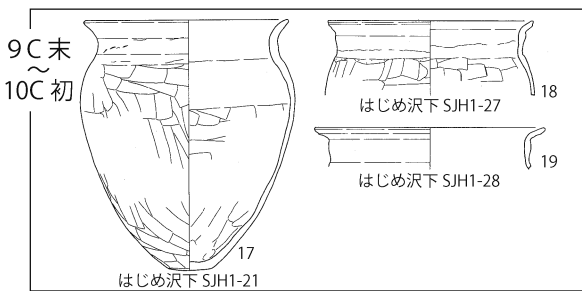
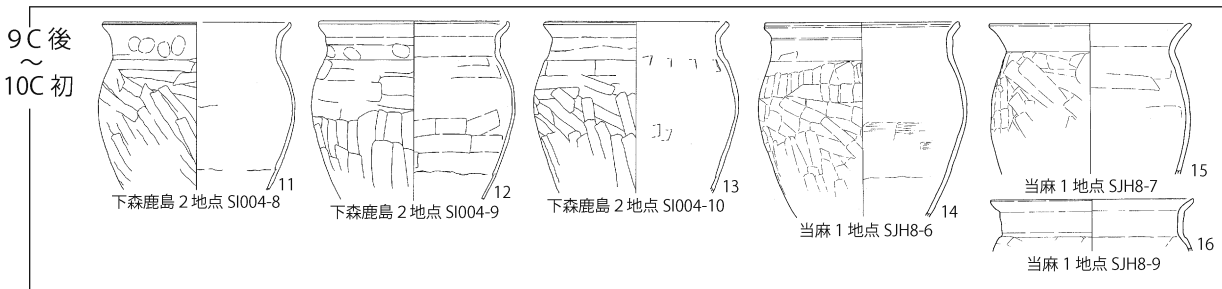
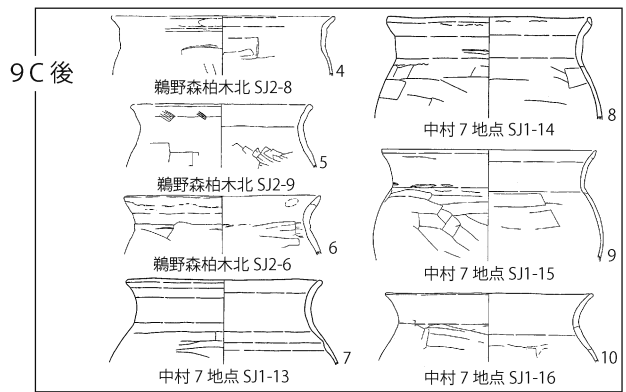
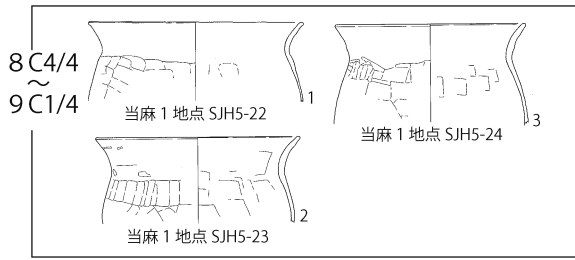
2-5 栃木県の様相

栃木県も千葉県と同じように複数の甕が混在する状況だが、宇都宮市東谷・中島遺跡群で時期幅のある比較的まとまった量の武蔵型甕が出土しているため、宇都宮市周辺から抽出を行った(第6図)。

8世紀中葉の段階では「くの字」状となる2・4と、胴部の膨らみが弱く頸部が緩やかな「くの字」状となる1・3などが認められる。前者が中葉、後者がやや古い様相を持つ。8世紀後半に含まれる7・9・11・13もこの段階の様相を持つものと考えられる。

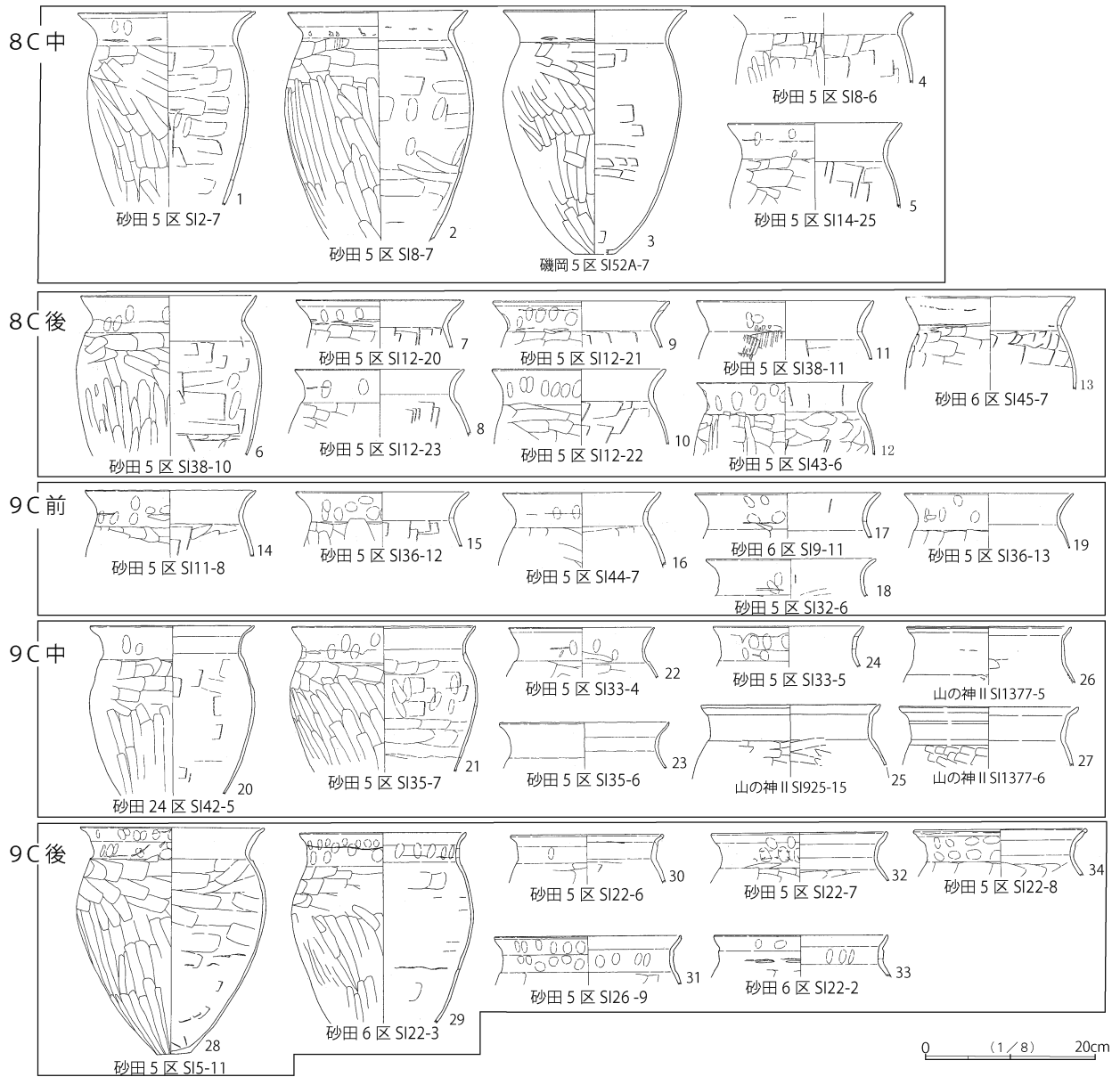
8世紀後半では「くの字」状が崩れ弓形となった6・8・10・12が認められるが、「コの字」状口縁への過渡期的な様相を持つものは認められない。

9世紀前半は特徴的で、他の地域では「コの字」

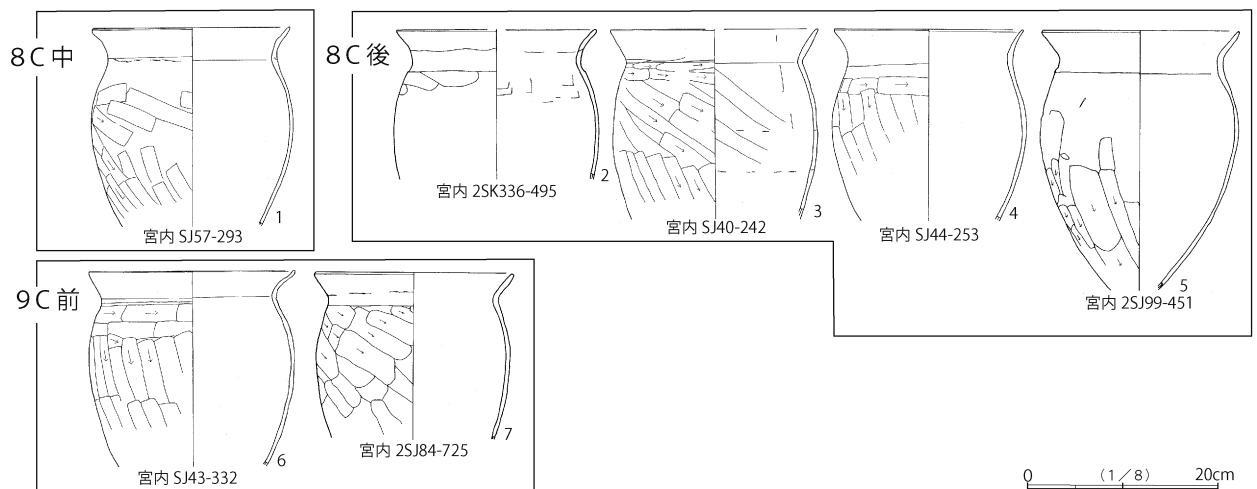


0 (1/8) 20cm

第5図 神奈川県相模原市の様相



第 6 図 栃木県宇都宮市の様相



第 7 図 茨城県坂東市の様相

状化が進む段階であるが、当遺跡ではまだ「くの字」状崩れが多い傾向にある。強いて選ぶならば18がやや「コの字」状化への移行期的な様相を持つが、各辺が成立しておらず、まだ弓形の段階であろう。

9世紀中葉の段階では量的には少ないものの頸部が「コの字」状となる20が認められる。また「コの字」状口縁の前身的な形態にあたる21・23が認められ、これらは加須市宮東遺跡第75b号住居跡と同様の形態であると考えられるため弘仁九年(818)前後の様相を持つものか。25～27は「コの字」状成立期段階のものと考えられ、口縁部が縦に長い様相を持つ。9世紀中葉の中でもやや後出するものと考えられる。

9世紀後半には明確な「コの字」状口縁を持つ29～31・33が主体を占める。この時期には他地域と同様の変遷になるようである。また32・34は「コの字」状が崩れる段階にあたりと推察され、やや後出するものと考えられる。

9世紀後半頃までは武蔵型甕が一定量出土するものの、10世紀頃になると常陸型甕など他系統の甕で占められるようになり、急に姿を消す。

以上、宇都宮市周辺の様相を概観した。8世紀中葉段階から9世紀後半まで継続的に使用されているようである。ただ9世紀前半まで「くの字」状口縁が占めている状況は特徴的である。武蔵型甕の変化が地域によって若干の時期差を持つということだろうか。

2-6 茨城県の様相

茨城県域では常陸型甕が大半を占めており、武蔵型甕は旧下総国域に当たる西部地域で僅かに認められる。坂東市で少量ながら確認できたため、同市から抽出を行った(第7図)。

量は非常に少ないが、一応8世紀中葉から9世紀前半までのものが出土しており、いずれも口縁部も含めて薄手という印象を受ける。大半が「くの字」状の頸部になるもので、「コの字」状への過渡期的な様相を持つものも認められない。

以上、関東地方全体の様相を概観した。次に各県における変遷を比較していく。

3 埼玉県北部における形式変化との比較

別稿(滝澤2023)で発表した埼玉県北部における武蔵型甕の変遷案が第8図である。

埼玉県北部では8世紀第1四半期から10世紀第3四半期までを14段階に分類した。各段階の特徴を示したものが上段、各段階の断面と調整を比較できるようにしたものが中段の図である。

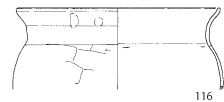
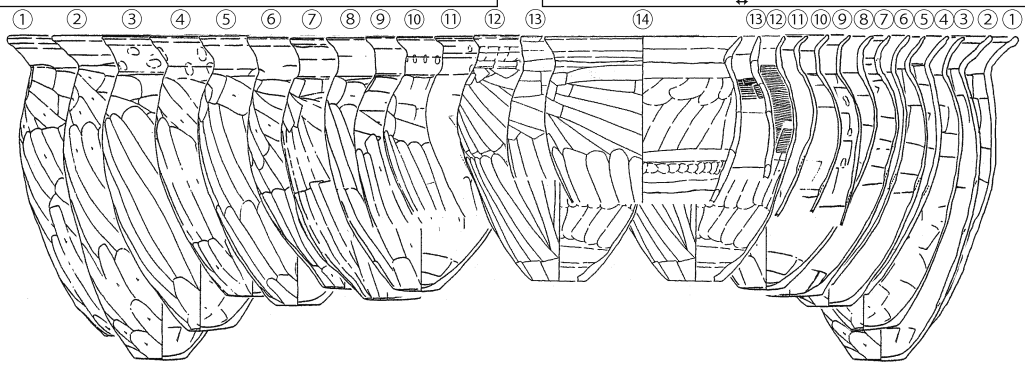
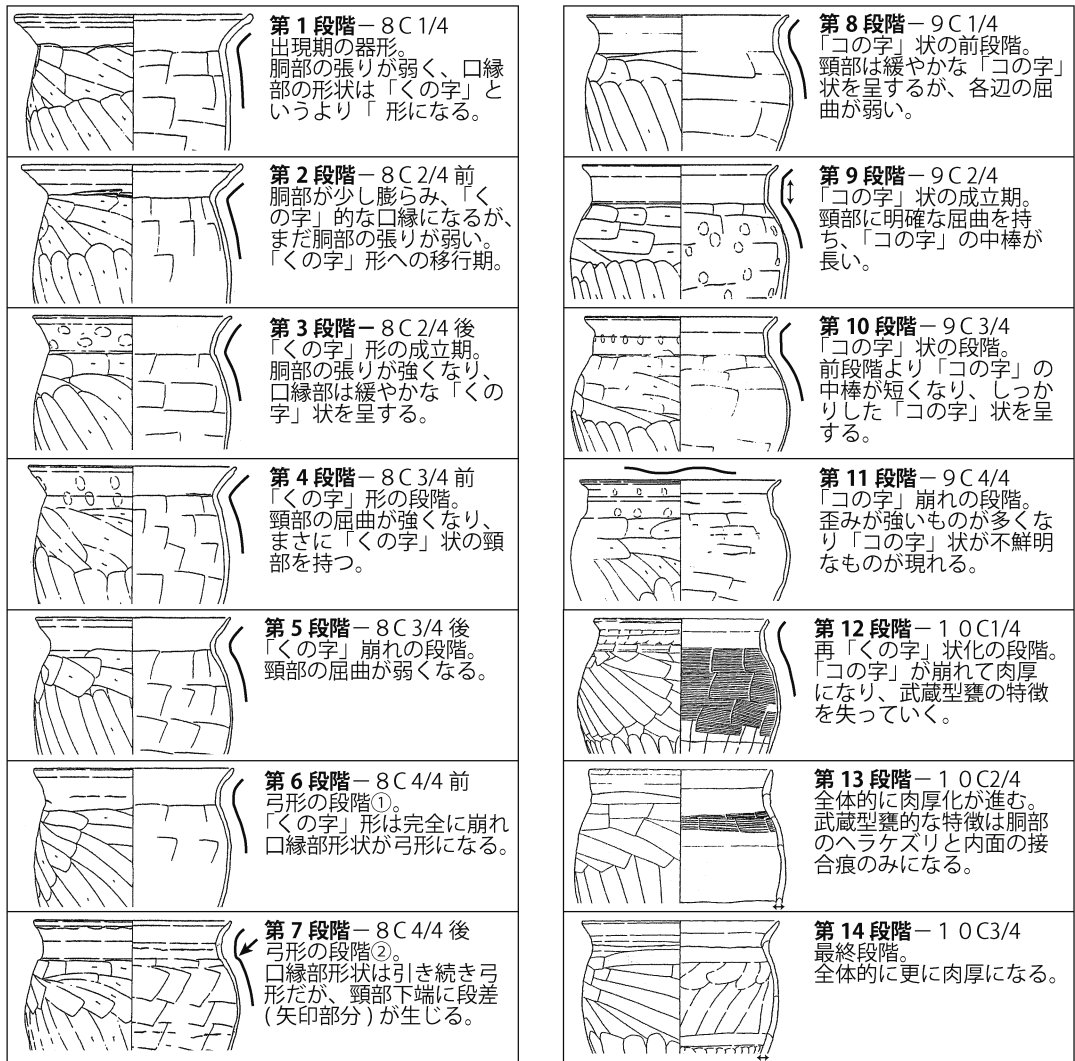
このうち第8段階にある「コの字」状の前身にあたる甕(第8図下段左)が、加須市宮東遺跡第75b号住居跡から出土している。この住居跡は弘仁九年(818)に発生した弘仁地震による液状化現象で噴出した砂層が床面に堆積しており、震災発生時に被災した住居跡と考えられる。液状化現象は震災発生と同時に起こったと考えられることから、この資料を実年代がわかる定点資料と位置づけ、「コの字」状前身にあたる第8段階を弘仁地震(818)前後の9世紀第1四半期とした。

また長野県浅科村(現:佐久市)砂原遺跡でも、仁和四年(888)に発生した仁和洪水によって埋没した住居跡が検出されており、カマドから残存率の高い武蔵型甕が出土している(第9図下段右)。

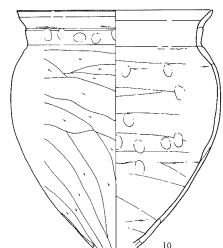
住居廃絶後に間を置かず埋没したとされるものだが、洪水砂が僅かな三角堆積以外覆土全体を占めることから、当住居跡から出土した遺物は888年に限りなく近い時期を示すものと考えられる。

そこで埼玉県北部と佐久市における武蔵型甕の変遷との比較を行い、同様の変遷を示すことから、同住居跡から出土した「コの字」状崩れ段階の甕を第11段階のものと考え、888年を含む9世紀第4四半期に位置づけた。

この変遷案を基に各県の中から似た形態のものを抽出したものが第9・10図である。元図番号は各断面図の下に添付した。前・中・後半分けと四半期分けが混在するため、番号が多少前後している。

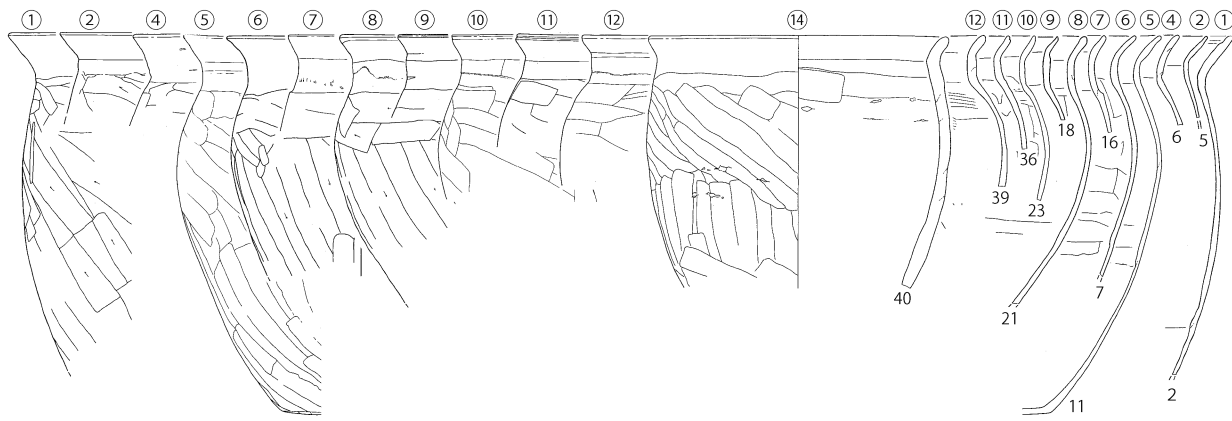


弘仁九年(818)地震によって被災したと考えられる
加須市宮東遺跡第75b号住居跡床面出土武蔵型甕

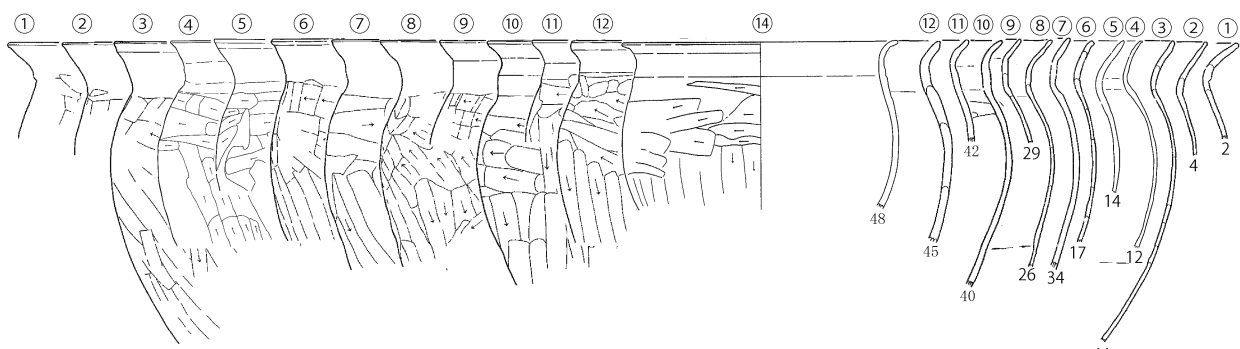


仁和大洪水(888)の影響と考えられる砂に覆われた
佐久市砂原遺跡1号竪穴住居跡カマド出土武蔵型甕

第8図 武蔵型甕変遷案と定点資料(滝澤2023から転載・一部編集)



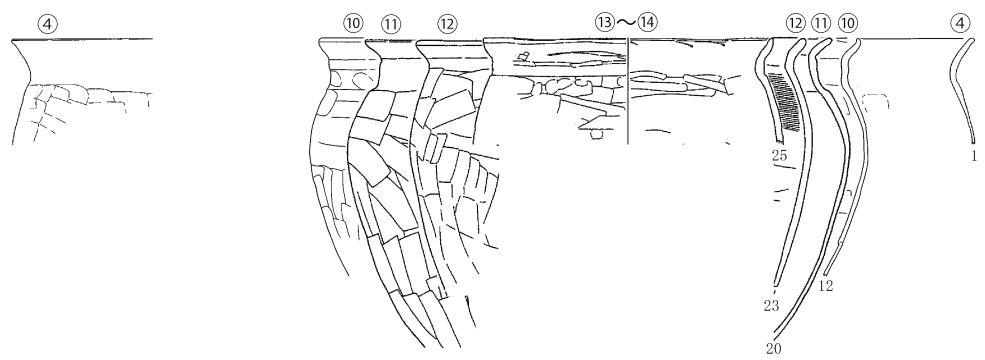
群馬県の様相



東京都の様相



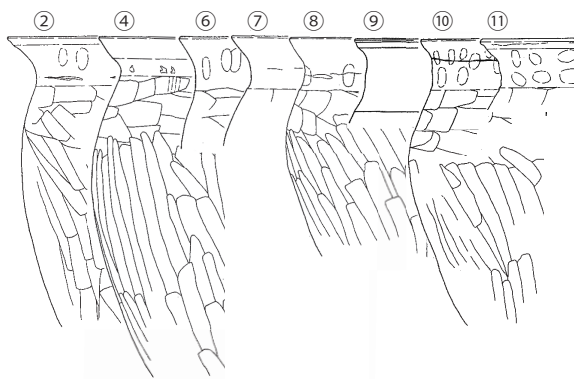
千葉県の様相



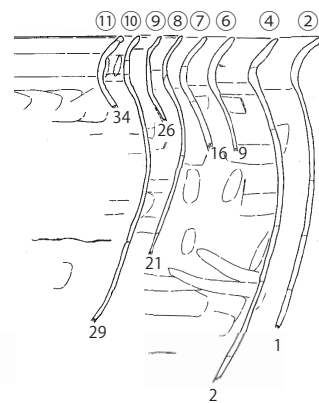
神奈川県の様相

0 (1/6) 10cm

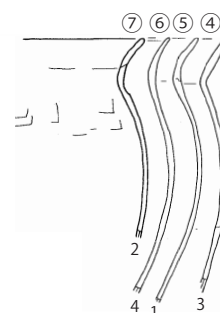
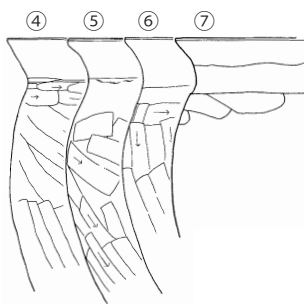
第9図 各地の変遷①



栃木県の様相



茨城県の様相



0 (1/6) 10cm

第10図 各地の変遷②

群馬県では1～14段階まで確認できる。各段階の年代観は、1段階が7世紀末～8世紀初頭、2段階は8世紀前半、4段階は8世紀第3四半期、5・6段階は8世紀後半、7・9段階は9世紀前半、8段階は9世紀第2四半期、10段階は9世紀中葉、11段階は9世紀第4四半期、12段階は10世紀第1四半期、14段階は10世紀後半となっている。3や13段階など欠落する箇所もあるが、今回の抽出作業の際に抜けたもので、周辺地域も含めれば補完されるものと思われる。

東京都も同様で、1～14段階まで確認できる。各段階の年代観は、1段階が8世紀第1四半期、2段階は8世紀第2四半期前半、3～5段階が8世紀中葉～後半、6段階が8世紀後半～末葉、7・9段階が9世紀前半～中葉、8段階は8世紀末～9世紀前半、10・11段階が9世紀後半、12段階が9世紀後半後出、14段階が10世紀後半～末葉とされる。10世紀前半の特徴を持つ12段階がや

や早く認められることから、「コの字」状崩壊に伴う「くの字」化が他の地域よりやや早く生じるのだろうか。また7段階が9世紀前～中葉に含まれるが、これは古いものが残っている可能性がある。

千葉県では2～9段階まで確認できる。各段階の年代観は、2段階が8世紀第2～3四半期前半、3段階が8世紀第2四半期、4段階が8世紀第3四半期、5・6段階が8世紀第3四半期～9世紀初頭、7段階が8世紀第4四半期、8段階が9世紀第1四半期、9段階が9世紀第2四半期、10段階は時期言及無しの中に含まれる。分類段階では下総地域と上総地域で分けたが、あまり相違が無かったため統合した。先述の通り8世紀代が多く、9世紀中葉以降のものは少ないが、形態変化は同様である。

神奈川県は9世紀後半以降のものが主体となり、主に10～13段階となる。各段階の年代観は、4段階が8世紀第4四半期～9世紀第1四半期、10

段階は9世紀後半～10世紀初頭、11段階が9世紀末～10世紀前半、12・13段階は10世紀前～中葉とされている。4段階は1四半期程時期がずれるが、1遺構のみであるため、地域的な特徴なのか古い形態が残っているのかは不明である。

栃木県については2～10段階まで確認でき、10世紀以降認められなくなる。各段階の年代観は、3・4段階が8世紀中葉、6段階が8世紀後半、7段階が9世紀前半、8・9段階が9世紀中葉、10段階が9世紀後半とされる。形態変化の様相は他の地域と類似するが、「くの字」状口縁が9世紀代まで残る傾向が認められる。地域的な特徴か、または派生した別系統のものだろうか。

茨城県も4～7段階まで確認できる。各段階の年代観は4・6・7段階が8世紀後半、5段階が8世紀中葉とされる。4は8世紀後半に含まれるが古い形態のものが混ざったのだろうか。形態的には他の地域と変わりはない。

武蔵型甕は同一時期でも個体差が激しい遺物と思われているが、変遷案に示した各段階と類似した形態を各都県で確認することができ、また年代観にも大きな矛盾は無いと考えられる。

設定した各段階は変遷の中の一部を断片的に切り取ったものであり、実際にはシームレスに移行していると思われる。また大形でかつ薄手に作られるものであることから、バリエーションが豊富であり、一概に枠に当てはめることはできないだろうが、一つの系統として提示した流れがあると推測される。

そして武蔵型甕は群馬県や埼玉県北部でやや先行して現れることや、東京都でやや早く「コの字」状の崩壊が始まること、また出現や消滅の時期の差はあるものの、形態変化の様相と時期にはあまり時間差は認められない。

以上の状況から、武蔵型甕は非常に広域かつ大量に分布するものだが、分布する全域で同時に形態変化が進行していると考えられる。

おわりに

今回は関東地方における武蔵型甕の変遷を概観し、形態変化が同時に起こっている状況を確認した。関東地方以外にも長野県や新潟県で確認されているが、広域で更なる資料収集が必要となるため、甲信越地方については改めて報告したい。

同時に変化する状況は確認できたが、問題となるのは生産体制である。模倣品や他地域の甕との折衷様式の存在など、興味深い事例が確認できているが、これらを詳細に検討するには資料実見や胎土分析の資料蓄積が必要と考えられる。

特に自然科学分析については、長野県や新潟県などの流通先では分析が進んでいるが、比較対象となるべき群馬県・埼玉県・東京都の事例が非常に乏しい状況にある。生産体制や流通構造を考える上で重要な視点になると考えられるため、埼玉県内での自然科学分析の実施も検討していきたい。

また生産の中心地と想定されている群馬県・埼玉県・東京都では、9世紀代に弘仁九(818)年と元慶二(878)年に2回の大地震が発生している。これらの地震が与えた影響についても、生産体制や生産場所の推定に繋がると考えられるため、検討が必要と考えられる。

床面で液状化現象痕が確認された宮東遺跡第75b号住居跡に端を発して武蔵型甕の検討を行ってきたが、本論文を作成している最中に令和6年能登半島地震が発生し、完成時点で被害の全貌がわからない状況が続いている。災害痕跡は考古学上では年代がわかる資料であることから興味深い事象であるものの、その裏には多くの悲しみがあることを再認識した。これらの災害痕跡を将来の減災に役立てられるように研究を深めていきたい。

被災された方々には心よりお見舞い申しあげます。

本稿の執筆に当たり、千葉県の記事について浅野健太氏から助言を頂いた。記して感謝したい。

参考文献

- 相田泰臣ほか 2012 『林付遺跡 第2次調査』新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書
- 伊藤公明ほか 2000 『寺所遺跡第2次発掘調査報告書』大泉村埋蔵文化財調査報告第14集
- 白田武正ほか 1998 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1－軽井沢町内・御代田町内・佐久市内・浅科村内－』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書30
- 岡村秀雄ほか 1991 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2－佐久市内その2－』長野県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書12
- 春日真実 2007 「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』第18号 新潟県考古学会
- 河野喜映 1976 「厚木市鳶尾遺跡出土の土器編年試論－歴史時代を中心として－」『神奈川考古』第1号 神奈川考古同人会
- 桜岡正信 2003 「武蔵型甕について」『高崎市史研究』第17号 高崎市
- 末木啓介 1997 「(4) 煮炊具」『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集
- 高橋一夫 2010 「常陸型甕と武蔵型甕」『埼玉考古』45号 埼玉考古学会
- 滝澤誠 2021 『宮西Ⅰ／宮東Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第467集
- 滝澤誠 2023 「定点資料を用いた武蔵型甕の変遷とその年代観」『国土館考古学』第10号 国土館大学考古学会
- 田中祐樹 2021 「金屋遺跡出土関東系土器について1－武蔵型甕とその周辺－」『研究紀要』第12号 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田中祐樹 2023 「武蔵型甕の胎土分析について－令和4年度成果概要報告－」『三面側流域の考古学』第20号 奥三面を考える会
- 堤隆 1993 『砂原遺跡－洪水に埋もれた耕地と古代の村－』浅科村文化財調査報告第6集
- 富田和夫 2003 『熊野遺跡(A・C・D区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第279集
- 長谷川厚 1996 「古代前半期における関東地方の煮炊具の様相」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東4煮炊き具－』古代の土器研究会
- 原明芳 1996 「甲信地域の8・9世紀の煮炊具」『古代の土器研究』律令的土器様式の西・東4 煮炊き具－』古代の土器研究会
- 平林大樹 2022 「仁和の洪水砂」と条理水田出土資料の実年代」『古代東国における年代定点資料の検討』東国古代遺跡研究会
- 水沢教子 2007 「屋代遺跡群出土煮沸具の胎土分析(上)－分析資料とその概要－」『長野県立歴史館研究紀要』第13号 長野県立歴史館
- 水沢教子 2008 「屋代遺跡群出土煮沸具の胎土分析(下)－分析の詳細－」『長野県立歴史館研究紀要』第14号 長野県立歴史館

図版出典

第1図：地理院地図GSIMapsを基とし、末木2001、相田2012等を参考に筆者作成 / 第2～7図：下記引用資料を基に筆者作成 / 第8図：滝澤2023から転載・一部編集 / 第9図：第2～5図を基に筆者作成 / 第10図：第6・7図を基に筆者作成

引用資料

群馬県

- 笹澤泰史 2005 『石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第340集
- 笹澤泰史 2006 『諏訪ノ木VI遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第361集
- 桜井美枝ほか 2006 『高源地東Ⅰ遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第383集

高島英之ほか 2021 『唐堀 C 遺跡』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 678 集
谷藤保彦 2020 『四戸遺跡』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 668 集

東京都

五十嵐彰ほか 2014 『桐ヶ丘遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第 296 集
丹野雅人ほか 2012 『北区田畑西台通遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第 272 集
丹野雅人ほか 2015 『北区道合遺跡赤羽上ノ台遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第 303 集
丹野雅人 2020 『北区田畑西台通遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第 349 集

千葉県

朝比奈竹男ほか 2005 『千葉県八千代市上谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連文化財調査報告書Ⅱ』八千代市遺跡調査会
阿部寿彦 1991 『千葉県四街道市和良比遺跡発掘調査報告書Ⅲ』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 43 集
浅利幸一ほか 2003 『市原市稲荷台遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告書Ⅸ 財団法人市原市文化財センター
糸川道行ほか 2006 『四街道市小屋ノ内遺跡（2）縄文～中・近世編』千葉県教育振興財団調査報告第 557 集
糸川道行ほか 2007 『四街道市小屋ノ内遺跡（3）』千葉県教育振興財団調査報告第 586 集
岸本雅人ほか 2009 『四街道市稲荷塚遺跡』千葉県教育振興財団調査報告第 613 集
喜多裕明ほか 2018 『笹目沢Ⅰ遺跡（第 3・4 次）・笹目沢Ⅱ遺跡（第 3 次）・南作遺跡（第 2 次）・浮矢遺跡Ⅰ（第 2 次）』公益財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 352 集
小出紳夫ほか 2002 『坊作遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅵ 財団法人市原市文化財センター
関口達彦 2006 『千葉東南部ニュータウン 千葉市城ノ台遺跡』千葉県教育振興財団調査報告第 539 集
常松成人 2007 『千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書 平成 18 年度』八千代市教育委員会
常松成人ほか 2007 『千葉県八千代市浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡』八千代市遺跡調査会

神奈川県

井辺一徳ほか 2009 『はじめ沢下遺跡』かながわ考古学財団調査報告 236
大塚健一ほか 2013 『当麻遺跡第 1 地点』かながわ考古学財団調査報告 287
大山祐喜ほか 2016 『下森鹿島遺跡第 2 地点』国際文化財株式会社
河本雅人ほか 2013 『相原八幡前遺跡第 6～10 地点』相模原市埋蔵文化財調査報告 42
熊坂正史ほか 2016 『神奈川県相模原市中村遺跡第 7 地点』株式会社武蔵文化財研究所
後藤喜八郎ほか 1996 『相模原市 No.62 遺跡発掘調査報告書』相模原市 No.62 遺跡発掘調査団
戸羽康一ほか 2013 『小保戸遺跡』かながわ考古学財団調査報告 288
中川真人ほか 2011 『苦久保遺跡第 3 地点』相模原市埋蔵文化財調査報告 40
中川真人ほか 2015 『当麻芹沢遺跡』相模原市埋蔵文化財調査報告 46
迫和幸ほか 1999 『田名塩田遺跡群』Ⅰ 田名塩田遺跡群発掘調査団
領家玲美 2005 『鶴野森柏木北遺跡』相模原市埋蔵文化財調査報告 32 相模原市

栃木県

津野仁ほか 2005 『東谷・中島地区遺跡群 No.6 磯岡遺跡（2～7 区）』栃木県埋蔵文化財調査報告第 292 集
津野仁ほか 2007 『東谷・中島地区遺跡群 8 砂田遺跡（4～6・18・19・23・24 区）』栃木県埋蔵文化財調査報告第 305 集
永井三郎 2013 『山の神Ⅱ遺跡・欠ノ上Ⅰ遺跡・欠ノ上Ⅱ遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 359 集

茨城県

小林和彦ほか 2012 『宮内遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 359 集
舟橋理ほか 2014 『宮内遺跡 2 長右衛門元屋敷遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 387 集

研究紀要 第38号

2024

令和6年3月13日 印刷

令和6年3月22日 発行

発行 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

<https://www.saimaibun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 関東図書株式会社